

武蔵野日曜集会

同質性

――ヨハネ伝第10章22～42節――

1968年2月4日

小池辰雄

名実一如 同じ根源から発している現象 同質性 汝らは神々なり 善を思ふ心 神らしさ
内村鑑三の『求安録』 中江藤樹の「孝」 中世の神秘家たち 一つとなる道（ヴィア ウニ
ティーバ）「イルミナツィオン」 太虚神道 神・キリスト・聖霊の三つの共通分母 御霊
の交際 われとキリスト我らは一つなり

【ヨハネ10・22～42】

22 その頃エルサレムに宮^{みや}潔^{よめ}の祭あり、時は冬なり。23 イエス宮の内、ソロ
モンの廊を歩みたもうに、24 ユダヤ人ら之を取^{とり}圍^{かこ}みて言う『何時まで我らの
心を惑わしむるか、汝キリストならば明白^{あらわ}に告げよ』25 イエス答え給う『わ
れ既に告げたれど汝ら信ぜず、わが父の名によりて行^いうわざは、我に就きて
証^{あかし}す。26 されど汝らは信ぜず、我が羊ならぬ故なり。27 わが羊はわが声をきき、
我は彼らを知り、彼らは我に従^{したが}う。28 我かれらに永遠の生命を与^{あた}うれば、彼
らは永遠に亡ぶることなく、又かれらを我が手より奪^{さら}う者あらじ。29 彼らを
我にあたえ給^{たま}いし我が父は、一切のものよりも大^{おほ}なれば、誰にても父の御手
よりは奪^{さら}うこと能^{あた}わず。30 我と父とは一つなり』31 ユダヤ人また石を取り
あげてイエスを撃^うたんとす。32 イエス答え給^{たま}う『われは父によりて多くの善
き業^{わざ}を汝らに示したり、その孰^{いづれ}の業のゆえに我を石にて撃^うたんとするか』33
ユダヤ人こたう『なんじを石にて撃^うつは善きわざの故ならず、瀆^{けが}言^ごの故にして、
汝人なるに己を神とする故なり』34 イエス答え給^{たま}う『なんじらの律法に「わ
れ言う、汝らは神なり」と録^すされたるに非ずや。35 かく神の言を賜^{たま}りし人々
を神と云えり。聖書は廃^{すた}るべきにあらず、36 然るに父の潔め別^{わか}ちて世に遣^はし
給^{たま}いし者が「われは神の子なり」と言^いえばとて、何ぞ「瀆^{けが}言^ごをいう」というか。
37 我もし我が父のわざを行^いわずば我を信^{まを}ずな、38 もし行^いわば仮^{たと}令^いわれを信^{まを}ぜ
ずとも、その業を信^{まを}ぜよ。さらば父の我におり、我の父に居^ゐることを知^しりて
悟^{さと}らん』39 かれら復^{また}イエスを捕^{とら}えんとせしが、その手より脱^{のが}れて去^いり給^{たま}えり。

40 斯^{かく}てイエス復^{また}ヨルダンの彼方、ヨハネの最初にバプテスマを施^ほしたる処
にいたり、其処にとどまり給^{たま}いしが、41 多くの人みもとに來^きりて『ヨハネは



何の徴をも行わざりしかど、この人に就きてヨハネの言いし事は、ことごとく真なりき』^{まこと}と言う。⁴²而して多くの人、かしこにてイエスを信じたり。

●名実一如

²²その頃エルサレムに宮^{みや}潔の祭あり、時は冬なり。

その祭は紀元前165年にマカベアのユダが決めたのでありまして、これはアンテリオコス・エピファネスという悪いやつが神殿を非常に汚したものですから。異教的なものですね。このユダス・マカベアスが、精神的な愛国者でもあります。新しく神殿を清めたその記念に行なわれたのであります。それから始まったので、12月の半ばくらいから一週間くらい、大体今のクリスマスというようなところに当たるくらいときであるので、そこで、「時は冬なり」なんて書いてある。全市に灯火^{ともしび}をかかげたというはなしです。

²³イエス宮の内、ソロモンの廊を歩みたもうに、

東の方にある。使徒行伝5章に出ている。

²⁴ユダヤ人ら之を取囲みて言う

「之を」というのはイエスのことです。

『何時^{いつ}まで我らの心を惑わしむるか、汝キリストならば明白^{あらかわ}に告げよ』

これはまたイエスを訴えようという、そういった魂胆があるような言葉です。そうすると、

²⁵イエス答え給う『われ既に告げたれど汝ら信ぜず、

たとえば、ヨハネ伝8章46節からみると、

「⁴⁶汝等のうち誰か我を罪ありとして責め得る。

もし私に罪があるというなら責めてみろと。

われ真^{まこと}を告ぐるに、我を信ぜぬは何故ぞ。⁴⁷神より出づる者は神の言をきく、

汝らの聴かぬは神より出でぬに因る』(ヨハネ8・46～47)

お前たちはサタンから出発しているからと。それで、

「既に告げたれど信じない」

というのはそういうわけです。

わが父の名によりて行^いうわざは、我に就^{あかし}きて証す。

私たちは、

「キリストの名によりて、主の名によりて」

と言いますが、イエスは、

「わが父の名によりて」

と言う。いわゆる名義ではないです、この「名」というのは。実を伴ったところの名で、名実一如であります。

「父の実において、実名において」



ということです。この「名によりて」というような言い方が、どうも日本人には、クリスチャンにも、そうはつきりしてないんじゃないかと思うんですが、非常に大事なことです。我々のなかでは、同名異人なんてこともあるけれども。同じ名前でありましても、その名が持っているところの実においては、もうこれは一つしかないわけです。実のない空名でなくて、その人特有の実を伴っているところの、それをうちに持っているところの名であつて、そうでない名なんてものは意味をなさない。それが

「父の名において」

ということ。

「父の名において行うわざは、我に就きて証す」

と。キリストは手放しで行なわない。すべてキリストは父の名において行なっている。何を言わなくとも、キリストの根源意識は「父の名において」です。私たちが、

「キリストの名において」

と言う時には、それだけの根源意識を持っているなら、それは本ものになりますけれども、祈る時にだけ一番終りにちよつと付け加えて、「キリストの名によつて」なんて言つたつて、それはちつとも名でも何でもありません。

「聖名をみだりにあぐべからず」

というのはそういうことです。そうでないと偽りになる。

キリストは一回といえども、父の名を浮いて考えておられない。我々は祈る時も、

「父よ、神よ。汝キリストよ、主よ」

と言うなら、その呼び掛けをいい加減にやつてはいかん。

それで、名が実でありますから、そこに業が出てくるので、

「名によりて行うわざは、それが私について証をしている」

という。

●同じ根源から発している現象

この水仙という花が太陽の光を証している。即ち、光を受けなければ花は咲かない。キリストは、神の名においてこそ自分の業というものがある。キリストの行為はそういう意味で、神の花なんだ。言葉も行為も、これは神さまの花ですよ。現象体なんだから。そういうズレのない在り方です。人間だというと、いつも言葉と行いということをや、

「一致しているか、一致していないか」

なんてことをしよつちゅう問題にしている。そんな現象の面からいくら問題にしたつてこれは始まらない。現象の奥のところを問題にしないで。

キリストはいつもその現象の奥の世界で連なっていますから。それがあつた時は言葉になるだろうし、ある時は行為になるだろうし、一向差し支えない。だから、言葉と行為は自



然に相即しているのであって、

「こう言ったから、さて、行いをしつかりしなければ」

なんて、そんなことを言ったって、とてもそれは本当に一つになりはしない。たとえば外側で一つになっても、それは本当の一つではない。

同じ根源から発している、言葉という現象、行為という現象、これは同質である。そういう意味においても、キリストにおいては――今日は「同質性」という題ですが――言と行が同質なんだ。それは同質であるから、本当の言であり、本当の行であって、言と行という外側に出たものを一生懸命に、

「さあ、これの一つにしましょう。こう言ったから、こうしなければなりません。

こうやったから、そいつはこういうように言います」

なんてなことではない。道德の世界でよく問題にするのは、こここのところを一つにしようと思って問題にしているけれども。もし、道德の世界なら、ここの一つは心の問題になるところが、単なる心では済まないものだから、もうひとつ深い問題があるものだからね。

²⁶されど汝らは信ぜず、

受けとらない、本当としない。「本当としない」ということだ、「信ぜず」とは。真まこととしない。

我が羊ならぬ故なり。

なぜ本当としないかと思うと、お前たちは私の羊ではない。私に属しているものではない。この言い方はその10章でさんざん言っているわけです。

「自分の羊は自分の声を聞くし、自分がまた羊をよく知っている」

と。この牧者と羊との関係がいかに一体不離であるかということを言っておられるわけですから、そこでこの「羊」というような言い方をする。キリストは神の小羊である。

²⁷わが羊はわが声をきき、我は彼らを知り、

声において「ああ、あの人だ」ということがわかる。「ああ、あの羊だ」ということがわかる。

彼らは我に従う。

本当に聴くということは同時に従うことになる。

²⁸我かれらに永遠の生命を与うれば、彼らは永遠に亡ぶることなく、又かれらを我が手より奪う者あらじ。²⁹彼らを我にあたえ給いし我が父は、一切のものよりも大おおなれば、誰にても父の御手よりは奪うこと能あたわす。

非常に強いわけですね。キリストに付ける者はもう既に永遠の生命を持っている。与えられてある。

●同質性

その次に著しい言葉が出てくる。

³⁰我と父とは一つなり』



「私と父とは一つである」

と。ギリシア語の原文によると、

「エゴ カイ ホ パテール ヘン エスメン」

「私と父、その我らは一つである」

と。「ヘン エスメン」「我らは一つである」と。ドイツ語でいうと「アインス ズイント ヴィア」、英語で「ウィー アー ワン」という。「我と父とは一つなり」という言い方をする、と、ちよつと三人称的な響きを多少持つような感じを受けますけれども。

「我と父、即ち我らは一つである」

ということです。

この「一つ」という字が「ヘン」という中性が使つてあるので、「ダス ゼルベ」ということになりますけれども。男性の「ヘイス」という言い方をしてないので、

「これは同質性を表すのではなくて、離すことができないのだ」

という註をしているドイツの本もあるけれども、私は少し意見がちがう。これは実は同質性で、ベンゲルはその同質性の方を言っている。ベンゲルというピエステンの有名な聖書註解書がありますが――古典的な註解です――これははつきりその同質的な角度から言つてます。またしかも、

「力を一つにしている」

というようなことも言っているけれども。まあしかし、「力を一つにしている」といったって、キリストは自分で力があるなんて思っていないから。むしろ、「本質的な一つ」で、本質を一つにしている。それで、同質ということ。

キルケゴールはよく「同時性」てなことを言いました。でも、キルケゴールがこの「同質性」まで言えなかったところに彼の信仰のひとつの弱さがあるので、これは同質までこなければダメなんだ。もちろん、キルケゴールもキリストについては同質ということを思っていたでしょうけれども。

今度は我々とキリストとの関係。キリストは神さまと、父と自分とは一つである。今度は、それが我々の問題になってくると、どういうことかと。もう少しあとからやりましょう。

● 汝らは神々なり

31 ユダヤ人また石を取りあげてイエスを撃たんとす。

「神さまと同じ一つだ」

なんて言うものだから、ユダヤ人はもう絶対にそれは彼らの觀念から許されないんです。これはもう瀆言だということです。冒瀆的なことであると。

32 イエス答え給う『われは父によりて多くの善き業を汝らに示したり、その孰の業のゆえに我を石にて撃たんとするか』



「父によりて行なう善き業なり」

と。自分は自分で善き業をしたのではない。キリストは自分を善いなんて思ってませんから。

「私の業はまさに父の名によりて、

「父によりて」と同じことです。

「その業は父のゆえに善いのであって、自分が何か道徳的に立派で善いのも何でもない。そのいずれの業のゆえに我を石にて撃たんとするか」

と言う。

³³ユダヤ人こたう『なんじを石にて撃つは善きわざの故ならず、

なかなか言うだけのことは言う。

「なるほどお前は善いわざをした。言うことも立派だ。けれども実はひとつ非常に

間違ったことをお前は言っている。また、考えている」

と。

讀言の故にして、汝人なるに己を神とする故なり』

今度ははつきり出てきた。

「神と一つだ」

なんてことを言うものだから。同質と解釈したわけですね。単に「離れない」という意味でなくて、神さまと同質だということを使うから、これはとんでもないと。

³⁴イエス答え給う『なんじらの律法に「われ言う、汝らは神なり」と録されたるに非ずや。

「汝らは神々なり」

という。口語訳では、「神々」と書いてある。「律法」といっていても、これは詩篇です。詩篇82篇6節に書いてある。ちよつとその詩篇は短いから読んでみましょうか。

「¹かみは神のつどのの中にたちたもう。

妙なことが書いてあります。

神はもろもろの神のなかにさばきをなしたもう。

そこで一応、その「もろもろの神」というものを認めているような言い方をしますね。

²なんじらは正しからざる審判をなし、あしきものの身をかたよりみて幾何時^{いくそのとき}をへんとするや。³よわきものと孤児^{みなしご}のためにさばき、苦しむものと乏^{ひく}しきものとのために公平をほどこせ。

「のためにさばき」というのは、そのためにその味方になって弁護するような審判ということとです。

⁴弱きものと貧しきものとをすくい、彼等をあしきものの手よりたすけいだしせ。⁵かれらは知ることなく悟ることなくして暗中^{くらみなか}をゆきめぐりぬ。地のもろもろの基^{もと}はうごきたり。



これでは全然、人間の世界は成り立たんぞというわけです、そんな不公平なことでは。

⁶我いえらく、なんじらは神（神々）なり、なんじらはみな至上者いとたかきものの子なりと。

⁷然どなんじらは人のごとくに死に、もろもろの侯きみのなかの一人のごとく仆れん。⁸神よおきて全地をさばきたまえ。汝もろもろの国を嗣つぎぎたもうべければなり。」（詩篇82・1～6）

と、実に不思議なことが書いてある。

「エロヒーム アツテム」

といまして、正に、

「神々なり、汝らは」

という言い方なんです。

「汝らすべてはエルヨーンの、即ち至高者いとたかきものの子らである」と。そういうへブライ語であります。

「人間は神の似姿につくられた」

と創世記1章27節にあります。ですから、神の似姿、同じ質を持ったものの、本来神的なものである。キリストは大胆に、

「お前たちは神々」

と言われている。

³⁵かく神の言を賜りし人々を神と云えり。聖書は廃すたるべきにあらず、キリストはここで特に註して、「神の言を賜りし人々」という。

「それを神々と言っているではないか。聖書の言は決して廃るわけではない」不動であると。

³⁶然るに父の潔め別ちて世に遣し給いし者が

即ち、自分のことです。

「われは神の子なり」と言えばとて、何ぞ「瀆言けがしごとをいう」と言うか。

ここではつきり、ユダヤ人の今までの觀念に対立して言われたわけです。しかも、その根拠を旧約聖書からキリストは持つてこられた。

本来、神の子である。神の似姿であるから、神につくられた者。それでキリストは

「父よ！」

と、しょっちゅう「父」と言っておられる。父ならば自分は子です。父が神なら、自分は神の子なんです。はつきりしている。同質なんです。

私たちが、クリスチャンが祈る時に、「お父さま」とか、「父よ」と言う。キリストも「そう祈れ」

と書いてある。それならば、自分たちは子なわけです。我々は神の子であるわけです。



●善を思う心

ややもすると、プロテスタント信仰の中にあまり「罪びと」の意識が――罪びとの意識はいくら強くてもいいですよ――ただ罪びとの意識だけである。マイナスの意識ばかりであつて、大事な隠れたプラスの意識がなくなつてしまった。それを思うことは非常なまぢがいのごとくに、

「神とは異質である」

てなことを言う、神学的に。

「質が違う、断絶している。その質を回復するためにキリストの贖いがある」

と。まあそれはそうでしょう。けれども、全然異質なものは神と言うこともできない。

私たちはとにかく善を思う心を持つている。また、何かしらんけれども、怖れ^{おそ}畏^{かしこ}む心もある。ただそれが本当の中心とならない、決定的な中心とならないということに我々が失われたる存在ということがあるので、全然ないのではない。

それはパウロがローマ書7章で言っているとおり。善と悪との、神につける姿とサタンにつく姿とのその葛藤が、天国と地獄の葛藤があつて、天国的なものは求めているのだが、神的なものを求めているのだが、どうもそのサタンのやつが強くて、どうにもならない。

「この死のからだより救はんものは誰ぞ」

と。「死のからだ」と言つて悩むということは、片一方に一面に光がある。その光の世界に本当に入りきれないから悩んでいる。光のいく世界が全然無交渉であつたら、悩みも何もありません。それはもう動物と同じことになってしまう。人間が悩める存在であるということは、その光と闇との交錯の中にあつて、どうも闇に打ち勝たれる。良心はあるんだ。けれども、良心の声が本当に力を持たない。いろんなごまかしがそこになされて

いる。

普段、平穩で何でもないとときは、みんないいような顔してますけれども、人生にはいろんなことにでつくわします。そのときに本当にそこを乗り切り突き破つて進んで行く、これは万人が必要としている。その万人が必要としている非常に大事な消息がこの信仰の事態なんだけれども、そのことには普通みんな気がつかない。

「まあ、宗教のことはちよつと後回しだ」

と、みんなそうしている。だから、真剣勝負で集会の中に体当たりしてくる人は極めて^{あかつき}暁の星のごとく少ない。我々はどんな事情にでつくわしましても、絶対にパウロと共に、

「為^せん方尽くれども望みを失わず、倒されるれども止^とびず」

という、そういうものを本当に受けとるために毎回、集会をしているわけですから。

●神いつね

それで、「^{けがし}瀆言^いどころのさわざではない」と。



37 我もし我が父のわざを行わずば我を信すな、

神さまの神的なわざが自分を通して出ないなら、それは信じなくていい。

38 もし行わばたとい仮令われを信ぜずとも、

「たとえわれを信ぜずとも」と、キリストは非常に譲歩した。

「たとえ私というものを信じなくても、そのわざを信じなさい。それは私のわざではない。神さまのわざなんだ。神わざが出ている。私はどう思われてもいい。しかし、これは本ものだ。神らしさがこの業において出ているのだから、これを見ろ」

と。私たちはまことに、「らしからざる」者でありながら、しかしまた、「らしき」というものも必ずある。これを見損なうなということが言えるんです。そういった矛盾逆説のような構造がわからなかったらダメですよ、この神秘の世界は。何がなんでも本当の「らしき」が見えないかというわけです。

自分を通して出ているこの業、これは

「自分は善き先生でも何でもない」

とキリストは言っている。

「なぜ、私のことを善いと言うか」

と。しかしながら、善きものは、善き言葉も善き行為も、自分が神を受けとっているから、そこに出てくる。それにおいて受けとれ、信ぜよと。

その業を信ぜよ。さらば父の我におり、我の父に居ることを知りて悟らん」

その業を本当に受けとれば、その業はただ外側の業ではない。内側から発している業だから。「父のわれにおり、われは父に居る」こと。その同質性のその実存のすがたは、今言った、

「われ父の中に居り、父わがうちに居る」

という。ドイツ語でいうと「ブライベン」、英語の「リメインド」、「その中に居る」ということ。

「知りて悟らん」という、非常に畳みかけてこの「知る」という言葉が別なテンスのギリシア語の形でいわれているけれども。「つらつら分かるぞ」ということ。

39 かから復またイエスを捕えんとせしが、その手より脱のがれて去り給えり。

と。こういうわけであります。

●内村鑑三の『求安録』

今日は2月4日ですね、私が今から4年前（1964年）のちょうど今日、東大を定年で辞めるので、「宗教と文化」と題して最終講義をした。その中に内村先生の言葉をちよつと引用したところがある。『求安録』という本を内村先生は書きましたが、今日は皆さんに記念に『曠野の愛』37号は差し上げますけれども。内村先生が『求安録』という本の中で信の消息を次のごとく記してある。



「英語の Believe 独逸語の Glauben は共にサクソン語の lyban (許す) なる語より来しも
のにして leave (捨てる、任せる) live (生きる) love (愛する) の三語は Believe (信ずる)
と根源を共にす。(独逸語の glauben, bleiben, leiben, lieben と対照せよ。)

「leave」というのは「捨てる、任せる」という字でしょ。「信ずる」という言葉はもと「任せる」ということ。だから、「信頼」の方です。全部、自分を任せてしまふ。捨てるとか任せるという字です。それから、「leave」は「live (生きる)」とやはりみんな連なっている類語なんです。「live」がまた「love」になる。生きることは愛することである。これが「信ずる」という言葉の根源的な連関を持った言葉なんです。神さまを愛するとは、神に自分をうち任せること。そうすれば、本当の生命に生きる世界に入る。これははつきりしている。

ドイツ語の「glauben (信ずる)」、bleiben (留まる)」、leiben (身を任せる)」、lieben (愛する) がまた同じなんです。これがやはり今の英語と同じような具合に、「信ずる」とは「その中に留まる」こと。そしてまた、本当にそこに「身を任せる」こと、それから、身を任せることがまた「愛する」ことである。面白いですよ。言葉の上からもそうなっている。即ち、信ずるは他に許すなり。

自分をすっかり許し任せる。

即ち、己を捨てて他に任かすなり。而して我は我の愛する人に我を任かすなり。我を許し、我を任かす人、即ち我の愛するものは我の生を繋ぐものなり、即ち愛は生命の精にして生命は実に愛なり。」

と、これは内村先生の言葉です。信生愛一如の世界です。だから、一般にいわれている「信仰」とか「信ずる」という言葉は、何か事柄を信じたりすることでは絶対にはないですから。生命的な実存的な全存在的な連なりでなければ、信なんてことはない。

●中江藤樹の「孝」

私はこの頃ちよつとまた日本のものを少し読んでいた。中江藤樹という素晴らしい人がある。近江^{おうみ}聖人といわれる。1608年から1648年の人で40歳で亡くなった。西近江の小川村の人だそうです、なかなか不幸であつたらしい。朱子学を学んだけれども、彼はもちろん自分で展開していった。彼は、「孝」に尽きる。今は一般に「孝行」なんていうと、こんなものは古い話だと思う。ところが、これは古くて新しいわけなんだ。どうぞ、戦後派の方々もひとつ目を見開いていただきたい。「忠孝」なんてのは古くさいと思っている。

「藤樹の曰く、一切の事柄、一切のものの道理を孝という」

「孝」とは万事万物の道理をいうんだと。天野先生が「道理の感覚」なんてことを説かれましたが。そして、もうひとつ別な言葉でいうと、それは神道である。これはいわゆる神道とちがう。「孝は神の道である」と。親孝行なんていうけれども、孝は神の道だと。これは天竺様——シナ流の言い方が天主、こちらは天皇だ——



「天主から庶民に至るまで、一これみな身を修むるをもつて本となす」

だから、「修身」という言葉はそこから来ているかもしれないよ。これは『大学』という本にもこういう角度から書いてある。修身なんて、およそ今はみんなけなしてしまつて、「また始まつたか」なんて思うかもしれない。そうじゃない。また始まつたかでも何でもない。孝というのはもうひとつ別な言葉でいうと、その次が凄い言葉です。

「太虚をもつて全体となす」

「太虚」とはどういうものかというのと、自分たちはお父さんお母さんによつて存在しているけれども、単に我々はお父さんお母さんによつて存在したのではないぞと。

「父母の身は天地に受くるものなり。」

父母の身は天地に受くる。そうすれば同時にやはり自分も天地から受けたということに結局、帰着するわけです。自分たちはなるほど相対的存在としては、お父さんお母さんによつて生じてきたものだけれども、しかし、人間というものは本来、天地に生を受けたもので、

「天地は太虚に受くるものなり」

と。いわゆる我々がいう天地というものも、これは何であるといつて対象化してつかむことのできない何ものか、根源なるもの、これを「太虚」といつている。虚は即ち無に通ずる。神的な無だよね。「太虚遍照」という言葉が坊さんの言葉にもありますけれども。太虚を遍く照す。だから、

「我々は本来、太虚神明の分身変化である」

という。ここに、「神明」という言葉が出てくる。大したもんですよ、この思想は。雄大な思想を持つている。もう完全に宗教的です。そういつた、「太虚神明の分身」である。太虚は何かというのと、別な言葉でいうと、神明である。何かしらんが、神的な照々たる光をもつた世界。それからとにかく天地があつて、天地によつてまた人間は生じているから、そのの分身だ。本来、人間というものは「太虚神明の分身」で、それが変化して現象したところのものであると。どうですか。これは完全にこの「太虚」と同質であることを言つたわけです。人間は本来、太虚と同質性を持つたものである。

「山川草木衆生悉く仏性あり」

という仏教の方のそういう言い方と似たわけです。それを仏性といおうが、神性といおうが、いいですよ。要するに、「我々は本来、太虚神明の分身変化である」という。

「神の似姿につくられている」

と、聖書の世界は非常にそこは人格的な表現になつていて。けれども、この中江藤樹の方は非常に靈的な表現をしている。しかも、「父母を於いてない」と、そういう意味においては非常に人格的な面もそこに出ているわけです。父母から受け継いでいるものも実は、根源はそこから来ているんだと。そういった自分というものを本当に自覚して、そして、この太虚神明の分身らしく、それに即するような在り方をするのが「孝」とあるという。



驚いたですよ、それが孝だと言う。

「いわゆる親孝行なんて言っているのと違うぞ」

と。日本の昔の人たちはやはり相当——相当じゃない——大いに根源的にものを考えている。佐藤仁斎でも、熊澤蕃山でも、凄いですよ。そういう、本来同質的な把握をして、そこに実存し、そこに道を、自分の身を修めるということが、観念から考えてものを言っているのではない。また観念によつて「かくあるべし」なんて思つてやつているのでもない。もうひとつ奥の世界から、その同質の世界を本当に自分でもつてはたと受けとつていけば、おのずから「修身」ということは本当の意味で出てくるぞと。

●中世の神秘家たち

我々はそういう同質性の世界に入らなければ、どうにもなりませんよ。外からいくら修養、

「すべしすべからず」

なんてことを言つてみたつて。絶対に聖書の言葉は全部その内側からものが言われていて、

「ならざるを得ない」

と迫ってくるもので、「すべしすべからず」ではない。その意味において、キリストがここで、

「汝らは神々である」

とまで大胆に言われた。これは今のキリスト教界にもう一遍このキリストの言葉を持つてこなければダメなんです。

「クリスチャンはみな神々であるぞ」

と。そんなことを言うものなら、普通の神学者は大反対するでしょう。それは誰あらん、キリストが言っている、ちゃんと。

「あんまり、罪びと、罪びとなんてことを言つてるな。それは罪びとの面もあるだろう。しょうがないだろう。けれども、もうひとつ奥に神々であるというこの同

質性をつかめ」

と。その同質性の世界に一生懸命で入ろうとしたのが、いわゆる中世の神秘家たちである。たとえば、エックハルトとゾイゼとタウラーというのがいた。もしこの三人をその質から言いますと、ちょうど知・情・意になる。エックハルトというのは、もの凄い認識の世界の——凄い直観的認識ですけれども——霊的な人。ゾイゼは非常に心情のあつい人だ。タウラーは意志的な人です。

一番その点で知的な角度ではありませんけれども——いわゆる知識ではない——タウラーがさんざん言っていることは、この「ゲラッセントハイト」（放下、解脱）なんです。さっきの「ラッセン」「任せる、捨てる」である。自分を捨ててかかれと。これはどの神秘家にももちろん共通するところの要素ではありますけれども。自分をうち任せた、空虚的な、自分を虚にしてしまった——太虚の虚に通ずるけれども——それを「ダスレーデッヒザイ



ン」(忘我、無我)というけれども。そして、自分を任せると――その点はみんな共通なものがある――神の意志が受けとられてくるという角度はもちろんみんな持ってます。彼らがどれほどにまで自分を打ち込んで任せるかというところに彼らの信仰が、いわゆる今のプロテスタントの命題的な信仰と違うかということは、確かにこの神秘家において大事なもののなんです。それを見損なつてはいけないわけです。

●一つとなる道(ヴィア ウニティーバ)

ゾイゼという人は、非常にそれが心情の面で深くキリストと結び付く。ゾイゼにおいてはかなりキリストという面が強く出てきています。即ち、

「われと父とは一つなり」

と、さつきあつたでしょ。それを

「ヴィア ウニティーバ」(一つとなる道)

という。「ウニティーバ」は「一つの」ということ。我々が今、キリストから直々に授かっている事態はこの「ヴィア ウニティーバ」「一つとなる道」、一道である。同一、一つとなる道。一の道というわけだ。それが「ヴィア ウニティーバ」という。この神秘の段階に、

「ヴィア プロガティーバ」(浄めの道)

といいまして、浄められること――「浄罪山」というのがあるでよ、あのダンテの「プロガトリオ」(煉獄)という――さつき、浄めの火、浄めの祭とあつた。それが罪の世界から聖なる世界へと浄められていく。これは一生懸命でまず善悪の葛藤をやっているような世界。神秘の三段階の第一段階を、そういった苦闘をとにかくやるわけだ、始めは。「プロガティーバ」だけではダメなんです。その次は、

「ヴィア イルミナティーバ」(光明の道)

という。イルミネーション、照明です。光を受けるわけです。

「天地神明の分身である」

なんてさつきあつたですね。「プロガティーバ」の段階で、一生懸命にこつちから悲願して、何とかして救われようと思つてやつているわけだ。そこへ上から光がきて、浄化されていく。上から光がこなければどうにもならんですよ、この蛍光灯なんていうのでは。太陽の光がこなければ。蛍光灯をかかっているような世界ではまだそれはダメなんで、この光が来て――ドイツ語でよく「エアロイヒトウング」(悟り)といいます、仏陀のあの悟りの世界がこれなんです。お釈迦さんの悟りを「エアロイヒトウング」といいます――これが「イルミナティーバ」という。

その次に、全く一つになつてしまう。これがさつきの、「ヴィア ウニティーバ」(一つとなる道)。そして、一と化する。まあ大体この神秘家たちは一生懸命で自分を「ラッセン」(任す)して、うち込んで、祈りの世界でうち込んでいくから、相当凄いところまでいく。また、



預言者たちがエホバの霊に対してそういう角度で行ったわけです。

ところが、そこにキリストが現れて、キリストは本来、神と同質のひとなんです。

「ホモウジ奥斯」(同質性)

なんだ。「ホモイウジ奥斯」(類似性)、似ているのではない。同質性です。三位一体というのがそうなんです。神とキリスト、それをつなぐものは聖霊ですから。キリストはこの「ヴァイア ウニティーバ」の中にちゃんと入っている。

「われと父とは、我らは一つなり」

と。これが「ウニティーバ」(一つ)の世界にちゃんと入っている。キリストは最大の神秘家であります。世界、東西古今いずこに行きましても、キリストほどの最大の神秘家はいない。シュバイツァーが『パウロス』という本を書いたときにその一番最初の行に、

「パウロは神秘家である」

と書いてある。なかなかシュバイツァーさんは面白いなと思った。正しい意味において、「ミユステイク」「奥義、神秘」ということ。パウロがよく言っているでしょ、

「この奥義には聖霊を受けなければ」

と言っている。大体すべてのものが神秘ですよ、少し考えてもらなさい。何だって神秘ならざるものはない。

●「イルミナツイオン」

その「ウニティーバ」(一つ)の世界にキリストは直接に入った。入ったけれども、キリストは自明的にそう言っているのではない

「汝の御意を。私ではありません」

と、いつも自分を「ラッセン」している。自分をいつも任せてしまっている。自己主張ではない。それは私が言っている「無」の世界なんです。無我、無私、私の無いというもの。「私の無い」という「ゼルプストローズイツヒカイト」(無我)にこなければ、この「ウニティーバ」の世界に入れない。「無い」といつて、ただ澄ましているのではない。

「神は霊なれば、^{まこと}霊と真とをもって拝せよ」

という、あの「真」というのは何か人間的な「真実」ではないですよ。真というのは、あるがままの自分を投げ捨てるのが「真」なんです。それよりほかに「真」なんてあると思っているから大間違いです。

「私はまだ真実性が足りませんで、まだ不純です。いつになったら純になるか」

なんて一生懸命で力んでいると、しまいにノイローゼになってしまう。ダメですよ、そんなのは。どうぞ、あるがままの、分裂のままの、傲慢なままの、何でもいいから、そのまま投げ捨ててくださいよ。何も心配いらんから。それが無私ということなんです。「無私」というと、「私心のない」というと、何か非常に心を澄まさなければいかんと思っているね。



そうじゃないですよ。あるがままの自分を投げ捨てることもう「私が無い」ということなんです。こんな簡単なことはいらないじゃないですか。皆さん、なにも心配いらんですよ。

「私は今もう混沌としています」

と、ああ混沌でいいよ。混沌たる自分を、カオスなる自分を投げ出す姿が即ち無私なんです。

「ああ、われ悩める人なるかな」

と言つて投げ出すのが無私なんです。

「われ罪びとの首なり^{かしら}」

と言つて自分を投げ出すのが無私なんです。非常にむしのいいはなしです。

そういう自分というものを投げ出す。「霊と真」というのがそういうことです。その霊は神からくるところの霊です。そうしたらもう完全にこの「ユニティーバ」(一つ)の世界に入る。この「ユニティーバ」の世界に入る道を開いているのが、「我は道なり」というキリストなんだから。それは十字架です。

「お前はそのままでもよろしい。もうお前はこの十字架で片づいてしまっている。私の十字架で完全に片づいているから何も心配いらん。そのまま投げ出してごらん」

と。そうしたら、「ユニティーバ」の世界に直ちに入ってしまう。

「エックハルトは素晴らしいな」

なんてなにも言う必要はない。あなた方はエックハルト以上になつてしまふ。

「エックハルト、タウラー、ゾイゼ、何かあらん。パウロ、ヨハネ、ペテロ、何か

あらん」

と。皆さん一人ひとりが完全にその世界に入る。それはこの十字架という門を通れば、絶対にそこには聖霊が来ますから。あるがままの自分が投げ出されてみれば、そこは神と同質の霊が、キリストの霊が、聖霊がくるから。本来そうであつたのを、そこから本質的に少しズレがきてしまったところに我々が罪びとでどうにもならないということがあるのだけれども。しかし、それは何も心配いらん。すぐ本当の世界に、同質の世界に入る。だから、そのような聖霊を受けなくては。聖霊が直接に、十字架という門を通して直ちにこの「イルミナツイオン」(光明)がくるから、そうしたら、「ユニティーバ」(一つ)の世界に入れる。ですから、

「私は信仰があります」

ともし言うなら、それは自分の信仰があるのではない。

「聖霊を受けております」

ということが即ち「信のある」ということです。こういう現実なんです。

●太虚神道

ですので、これはヨハネ伝の影響を受けているかもしれませんが――まだそこは本当に実



証的にはいきませんけれども——とにかく、中江藤樹なんていうのが「孝」なんて言ったって、その孝がいわゆる孝行の孝ではなかった。本当の孝というなら、そこから始まって、そして本当に「父母を敬え」ということの内容がそこから出てくる。そういう根源の世界だから、「国」所、世界の差別色々様々ありといえども、本来みな太虚神道のうちに開闢したる国土なれば、神道は十方世界みな一つなり。

自分がいるところのこの神の道は——もちろんそのときに神道というものもありましたけれども、それを言っているのではない——そういった神の道は十方世界みな一つなりと。

「百尺竿頭、身を躍り出たらば十方世界に身を現する」

という。即ち、十方世界みな一つである。全世界は、宇宙はみな一つだと。

然るによりて、国隔たりぬれば言葉風俗は変わるといえども、その心の位は本来同一体の神道なるによりて、唐国も天竺もわが朝もまたその他ありとあらゆる国土のうち毛頭違つことなし。」

と。大したもんです。

「人種が違おうが、イデオロギーが違おうが、そんなことはどうでもいい。本当にこの太虚神道の世界に入るならばみな一つだぞ」

という。これは同質性だと。そういう先輩がいたんだからね、見直さなくてはいいかん。

●神・キリスト・聖霊の三つの共通分母

キリスト者というならば、神(T、テオス)とキリスト(X、クリストス)と聖霊(P、プニューマ)の三つの共通分母(TXP)を持つている。皆さん一人ひとり、この共通分母を持つたaであり、bであり、またcであるわけです。この共通分母を持つているということが「信がある」ということなんです。自分の信仰でも何でもない。この共通分母をもつて、それによって割られているa、b、cだから。a、b、cはみな特殊性だけれども、

「みな一つなり」

というのはここで言えるわけです。これがロシア人であろうと、ドイツ人であろうと、日本人であろうと、そんなことはどうだっていい。どこの教会であろうと、カトリックであろうと、プロテスタントであろうと、私たちみたいな「幕屋」と称するのでも、何でもいいですよ。とにかく、そういうものがみんな一つになる。これみな一つなりと。

これはパウロが言っている通り。ちよつと開こうかね、コリント前書12章3節に、

「³然れば我なんじらに示さん、神の御霊に感じて語る者は、誰も『イエスは^{のろ}詛^ろわるべき者なり』と言わず、また聖霊に感ぜざれば、誰も『イエスは主なり』

と言う能わず。

聖霊において初めて私たちがキリストを主と言えるのであって、

⁴賜物は殊なれども、御霊は同じ。



プニユーマは一つだと。

⁵務めは殊なれども、主は同じ。

「務め」というのは「ディアコニア」という字です。主は同じだと。

⁶活動は殊なれども、凡ての人のうちに凡ての活動を為したもう神は同じ。

ここに、「御霊・主・神」と、この三位一体の事態を知らずに言っているわけです。

⁸或人は御霊によりて智慧の言を賜わり、或人は同じ御霊によりて知識の言、

⁹或人は同じ御霊によりて信仰、ある人は一つ御霊によりて病を医す賜物、

¹⁰或人は異能ある業、ある人は預言、ある人は霊を弁え、或人は異言を言い、

或人は異言を積く能力を賜わる。¹¹凡て此等のことは同じ一つの御霊の活動

にして、御霊その心に随いて各人に分け与えたもうなり。¹²体は一つにして

肢は多し、体の肢は多くとも一つの体なるが如く、キリストも亦然り。¹³我

らはユダヤ人・ギリシヤ人・奴隷・自主の別なく、一体とならん為に、みな

一つ御霊にてバプテスマを受けたり。而してみな一つ御霊を飲めり。」(コリン

ト前12・3～13)

どうですか、もうはつきりしている。この聖霊のバプテスマを受けなかったならば、いくら「一つ」と言ってみたって、いくら「一致、一致」なんて言ってみたってダメです。

その神と同質を常に受けとっているか。ルターが、

「クリスチャンは二律背反だ。罪びとであると同時に義人である」

と言った。その「義人である」ということは、このキリストの霊を本当に受けなければ、義の義たるゆえんがないわけです。

そういうわけで、全く問題なし。何も問題ない。あるがままで。皆さんは

「まだ私は聖霊を受けません」

なんて、そんなことないですよ。あなた方は正直にキリストの十字架に自分が本当にぶつ倒れてごらんないよ。

「われキリストと共に十字架せられたり」

と。どうにもならない自分を投げ入れてごらんない。「捨てる」と言ってみたって、どこへ捨てるか。キリストの中に捨てるのだから。十字架のキリストの中に捨てるのだから。「ラッセン」「リーブ」(捨てる、任せる)する。そうしたら必ず、ダメのまんまでありながら、奥にダメでない世界が開示してくるから。

何も力む必要はない。太陽の光を私たちは今、受けている。それと同じようになりますので、

「ああなんとまあ、すがすがしいことになってしまったか」

と。問題だらけだと思ったら実は、いくら問題があっても一向差し支えないことになってしまった。そこから一切の問題は解かれていく。それは本当の力を持っているから、聖霊は。本当の生命を持っている。本当の義を、本当の愛を持っている。



●御霊の交際

ピリピ書2章でも、

「この故に若しキリストにあるすめ、愛による慰安、御霊の交際、

「交際」は「コイノニア」です。御霊を深く受けていなければ、交わりなんて言っても、交わりにならない。「コイノニア プニューマティコス」（御霊の交際）というわけですね。

また憐憫と慈悲とあらば、²なんじら念を同じうし、愛を同じうし心を合せ

思うことを一つにして、我が喜びを充たしめよ。」（ピリピ2:1～2）

みんなそうです。同心、同愛、同悲、同念というわけだ。みんなこれは、ならざるを得なくなってくるんです。問題は、外側からそうするのではなくて、このキリストの霊がくれば、霊はもの凄い内容を持っているから、それを何と言おうと一向差し支えない。そんなものを外側から辻褄を合わせようとしたってダメですよ。そうしたらば、楽に受けとれてくる。律法のように受けとったらダメですよ。

「キリストの心を心とせよ」

と訳しているが、

「キリストと同じことになれ」

というような言い方がしてある。キリストと同じことになってしまふ。はばかりずして、なってしまう。その点で、キリストが大胆に、

「汝らは神々なり」

と言われた。そのキリストの本願を、

「我々は本質において、賜りたる神々的な事態である」

と。これがもう、決して驕ることはないんです。「賜りたる」という絶対恩寵の本願の世界ですから、もうこれはうれしくてしょうがないし、それでなければ、もし自分が驕ったらダメになるのに決まっているんだから。「謙遜」なんて言わなくなつて、本当の砕けの世界に入っている。そうしたらば、それが本当のまた権威なんです。本当の権威がそこに、御霊の権威というものが生じてくる。

「千万人といえども我往かん」

というものがそこにある。そういう我々の信の事態が同質な事態である。

●われとキリスト我らは一つなり

今度のキリスト新聞の「橄欖」という欄に、私は四回にわたって書いている。ついでにちよつと読んでみます。

「広島 長崎に原子爆弾が爆発して以来、20世紀後半は正しく原子力時代に突入した。それ自体は無にも等しい原子核がフィッション（核分裂）現象を起こすと、あの驚くべきエネルギーを出す。物質の極微の世界の原子構造に我らの太陽系がちよつと似てい



るといわれる。太陽は自然的存在としての我らの原子核といえるであろう。太陽が在ることが我らの地球と地球上のあらゆるものを在らしめている。この太陽が核爆発現象を不断に営んでいるといわれる。その発する光熱が我らの自然的生命のエネルギーの源であることは余りにも自明な事実である。自ら有ることが他を在らしめている太陽よりもはるかに根源的に自在が他在の根拠たるものは何か。それは被造物からは端倪すべからざるところの創造主である。この神はモーセにホレブの山でヤーヴェー神として示現なさった。そしてモーセの問いに対して、「私は有って在らしめるもの」(私訳と言いなさった。宇宙の存在根拠たる神は霊的実在者である。そのことはイエスが、「神は霊である。だから、拝する者も霊と真にあつて拝すべきである」(ヨハネ4・24)と喝破なさったことによつても明かである。自然的存在としての我らは太陽を思つて生きていない。太陽の光熱を身に浴びて生きている。しかれば、魂を存在の中核としている霊的存在としての我らも霊神の霊を浴び、受霊してこそ生きるのである。預言者たちも使徒たちもそのような現実をこそ信仰と言つていたことを現代キリスト教界は改めて洞察すべきである。」

という、第一回目の文章を書いた。

そういうことで、今日のところは非常に積極的な、極めて今日の太陽が私たちを照らしているような、照々として「イルミナツイオン」(光明)であつて、同時に「ウニティーバ」(一つ)の世界であると、大胆率直にこれを受けとらなければ、恩寵をみずから拒んでいることでもあります。それを一般のキリスト教徒たちがただ「罪、罪、罪」と言つてみたり、ただ「十字架、十字架」と言つてみたり、それでは始まらんです。

「汝ら、わが証人となれ」

とは、

「わが霊的生命、霊的人格体の証者となれ。その神明の分身変化^{へんげ}であれ」

と。中江藤樹さんの言葉は面白いよ、この「分身変化であれ」という。

どうぞそのようにして私たちはこのヨハネ伝10章の後半がなんと幸いなる音信であるか。なんのかんの言つて、集会を怠つていたら、後退しますぞ。どしどし前進してくださいよ。まあ、どうも人間というやつはね、どこかにぶつかつてコブでも出さないと、なかなかこれが目が醒めないで仕方がないけれども、お互いさまにね。けれども、もうこの福音に接したら、これを受けとつて前進せざるを得ない。この、

「われとキリスト、我らは一つなり」

と――「我らは一つなり」とのキリストの父に対する言葉を――直ちに私たちは、この聖霊のゆえに、十字架のゆえにはつきりと、いわゆる神秘家以上の素晴らしい世界を告白することが出来るわけであります。

